Project No. 00 | 保育

「保育システムで、こどもとゆったり関わる時間とゆとりを」アナログ業務が続く保育現場へのIoT機器・保育システムの導入支援を実施

TRY ANGLE EHIME

採択事業者名 保育ICTコンソーシアム

コンソーシアム構成員 一般社団法人 保育ICT推進協会・株式会社コドモン・株式会社Gakken

勉強会の実施概要

勉強会の目的	本事業の進捗状況や成果や国の動向などを情報提供し、各施設の状況を共有することで、ICT導入・活用に向けに取り組む施設の増加や、自治体一丸となってICT化に取り組む空気を醸成することにつなげる。
勉強会の当初のゴール想定と結果	ゴール想定｜ICT化の個別相談の実施による県内施設との接点増加 結果｜勉強会後の個別相談 6施設 施設訪問による個別相談 3施設（うち継続契約1施設）
参加者	県内の保育事業者を中心に、行政職員など37事業者48名が参加 内訳 東予 11事業者 13名 中予 16事業者 20名 南予 11事業者15名
協議アジェンダ	・プロジェクトの内容紹介 ・保育のICT化とは、国の動向 ・記録と計画をICT化するポイント
データに基づく協議ポイントの整理	支援者、実装先双方が、業務改善のために運用から見直すという共通認識のもと推進する必要がある。
主なデータ項目	園児の登降園情報（登園時間・降園時間・欠席など）、保育の計画・記録、体温、午睡時の体位や呼吸状況、身体計測、食事量、排泄状況
協議におけるガイドライン（含む具体例）	国は、施設運営費の給付などにも登降園データを活用する方向で進めており、それに伴うデータの仕様や補助金制度の変化など踏まえて協議を進める必要がある。 保育の質向上のために、単なるデジタル化ではなく運営から見直すため、国のガイドラインや事例集を参考にする必要がある。
「実装成果」実現に向けた示唆/考察	こでまで多くのデータを手書き、転記により記録してきた保育現場で、データの一元管理や活用により、業務改善による生産性の向上が可能となった。 現場の推進力やITリテラシーに課題が残るため、継続した支援が必要と考える。

➢ **新規導入した1事業者について**

印刷量→半減	➢ 前年同月比で印刷量が半減 ➢ 1～3万円/月が削減
朝の電話回数 →0回へ	➢ 7:00-9:00の電話回数（定員120名の施設） ➢ 1日5～10回→0回へ

データ活用・協議の具体例

重要指標例

これまでアナログに記録していた以下のデータを自動で記録化・各種帳票との連動
・園児の登降園、出欠状況
・当日の天気
・保育の計画、記録

	実装前	実装後
データ取得	・登園、降園時間を保育士が時計で目視確認 ・当日の天候を記録 ・子どもの様子を各保育士が確認	・登園、降園時間はタッチやカードで自動記録、欠席情報はアプリから送信されたものが自動記録される ・子どもの様子を各保育士が確認
データ利活用	・登園、降園時間を保育士が手書きで記録 ・日誌など各帳票に「天気」欄があり、何度も手書きで記録 ・子どもの育ちのための計画、記録を担任保育士がWordやExcelなどに記録	・登園、降園時間は運営費の給付申請などにも活用される ・計画、記録をSaaSで一元管理することで、保育の振り返りが容易になり、保育の質が向上する
実行	-	-
協議	-	-

データ活用・協議による成果

- 登降園情報などの記録の自動化により、生産性向上による保育の質の向上
- 保護者へのお知らせが紙→データになることで、保護者へのお知らせの情報量・適時性・スピードなどが向上

Copyright © EHIME Prefecture. All rights reserved.